



2015年(平成27年) 12月7日 月曜日

日刊 39

鎖を作る仕事に入ったのは1968年(昭和43年)4月、学生生活を終え初めて出た実社会です。弊社のお客様は北海道から九州まで、各地の造船所や船具問屋、地方の船具商(漁業家・船主向け)でした。入社して困ったことの一つは専門用語が多く、初めて聞く私には十分に聞き取れなかったことです。

ある時、山陰の船具店様(漁業家を主要顧客と



39

『尺貫法』匁と文



一文銭10ケの重量 36g

する)からの電話「三分、ラットチンのドブ漬けを一呎(カマス)、急ぐのですぐに送って欲しい」※②「13のミのロソクリンクチェー①」。又ある日「四分の雑チン、五尋(ひろ)、四本送ってくれ」※②。電話の内容を新人の判る言葉に翻訳すると、※①「9のミのショートリンクチェー」で垂鉛メッキを施したものを「カマス急いで送って欲しい」(現在は麻袋に入れていますが、当時はまだカマスに入れて納品していました。この

使ったことのない言葉が当たり前のように羅列される電話は、新人の私にとって毎日新しい言葉の勉強でした。今なら判らない言葉がある

衣川製鎖工業・衣川良介社長

画像はカラーと交換しています。



一文銭4ケと一円玉5ケの長さ 100mm

が、当時の先輩に聞くか自分で辞書を調べるしかなかった。辞書にはほとんど出ていません。(三分「35g」)

専門用語、尺貫法、ヤードポンド法、色々な言

葉の混在に戸惑いました。が、あなたの会社では新人が理解出来ない言葉を多く使っていますか?もしそうなら、新人にも判る業界用語翻訳資料を作成する必要があります。新人活性化法の一つとして。

話を本題に戻します。もともと、一貫目という重さは一匁の『寛永通寶』一文銭、千個を測った重量なのです。実際に『文銭』20ケでは72gでした。平均は一個3.6gで重量のバラツキは結構ありました。最大4.2g、最小3.2g、しかし中心部3.4-3.6gに半数の10ケが位置していました。多分、文銭の発行された寛文(かんぶん)年間には一匁の重量は3.6g程度だったのでしょう。明治の度量衡法、1891年によって長さの単位や重さの単位が厳密に統一されました。1匁=1000μ(マイクロ)3.75g、1匁=3.75g、重さは3.75gで明治の一匁の伝統を継承しているようです。足袋のサイズは十一文三分(26.5mm)、一文銭を並べて寸法を測った名残です。ただし、現在は一文を24gと計算してあります。手持ちの文銭を測ると25g±0.2gでした。いつでも正確な定規やばかりがある現在と異なり、江戸の人々は『寛永通寶』一文銭を重さや長さを測るメジャーとして持ち歩いていたので

江戸時代の人にならうてコインで測ってみましょう、1円玉は直径20mm、厚み1.5mm、重さは1gです。